2. 隣は何をする人ぞ

１９７０年、大阪で万国博覧会が開かれ、ニュータウンブームに湧いたあの頃、〝文化住宅〟と呼ばれる長屋形式の集合住宅で幼少期から思春期の 10 年間を過ごした。木造２階建てで、各階に４戸あり、２階の北から２軒目に、私は両親と兄の４人で住んでいた。部屋は４畳の台所と、４畳半、６畳の２間。隣近所も同じ間取りで、壁一枚をはさむのみ。誰がどんな風に暮らしているか、手に取るようにわかった。

中学生になるころ、北隣に住んでいたのは暴力団員の夫とその妻だった。強面の夫と派手な化粧の奥さんは、ケンカばかりしていた。夫に熱湯をかけられた奥さんが助けを求めて我が家に飛び込んできたこともある。奥さんを博打か借金のカタに売ったとわかる日もあった。そんな日は夫が所在なげに自宅玄関にもたれて突っ立っており、コトが終わると決まって壮絶な夫婦ゲンカをしていた。それでも夫婦が別れることはなく、仲睦まじく外出する日もあった。

南隣には〝青木のお兄ちゃん〟が１人で暮らしていた。醤油会社勤務の、男前ではないが優しい好青年で、ステレオコンポを買った時には、私たち兄妹を自室に招いて見せてくれた。かっこいいコンポだったが、サラウンドスピーカーの音が階下に響かないよう、漫画冊子数冊とコンクリートブロックを重ねた上に設置しなければならなかった。お兄ちゃんが音楽を聴くたびに、我が家の壁は震えたが、お兄ちゃんが消音に心をくだいていることを知っていたから、許せた。

さらに南端には、若い夫婦と２児の４人家族。４歳の男の子は赤ん坊のころから世話をしていたこともあり、我が家にも出入り自由で、弟のような存在だった。美人で垢抜けた母親とお調子者でスケベな父親は、ともに九州出身の気さくで開けっぴろげな性格。母親は我が家に遊びに来ている息子を迎えにきては、よく玄関先で夫の浮気性を私の母に愚痴っていた。

まるで家族のようだったが、別れは唐突に訪れた。一家は夜逃げしたのだ。お調子者の夫が車で接触事故を起こし、相手から請求された法外な損害賠償金を支払えなくなったからだ。逃げる直前、母親がこっそりと別れの挨拶に来たが、小さな弟にはお別れを言うこともできなかった。

お話した家族はそれぞれに全く違う価値観を持っていたが、壁一枚を隔てた空間で、互いをやんわりと受け止めながら暮らしていた。私はこうした暮らしから人生の機微があることを学んだ。その後、みんないい人生を送っているだろうか。

（平成 28 年 3 月）